



第 5 回 NCDA ウェビナー 2020 年 9 月 2 日(水)21:00~22:00(日本時間)

コーチ教育における<sup>アセスメント</sup>評価について

### <趣旨文>

コーチの<sup>アセスメント</sup>評価は、多くのコーチ教育プログラムのなかで極めて重要な要素ですが、学術的な研究文献のなかでは大部分であまり顧みられていません。それゆえ、コーチの学びに対して<sup>アセスメント</sup>評価が寄与する可能性は一般的に認識されてきませんでした。コーチの学びについて私たちが論じることには、重要な見過ごしがあります。

そこで、第 5 回 NCDA ウェビナーでは日頃からコーチ教育に取り組んでいるリアム・マッカーシー氏（英国・セントラルランカシャー大学）、クレア・マリー・ロバーツ氏（英国・プレミアリーグ）をお招きし、コーチ教育における<sup>アセスメント</sup>評価の注目度を高めること、世界中で行われている<sup>アセスメント</sup>評価の具体例を共有すること、コーチ教育における<sup>アセスメント</sup>評価に関する ICCE（International Council for Coaching Excellence: 国際コーチングエクセレンス評議会）のワーキンググループを紹介することを目的として開催した。

### <内容>

#### 【伊藤雅充教授】

イントロダクションと注意事項

#### 【ジョンベールズ氏】

総括のリアム・マッカーシー氏の紹介

#### 【リアム・マッカーシー氏】

はじめに、私たちが考える課題について紹介する。8年前に発表された論文は、コーチの役割として<sup>アセスメント</sup>評価を取り上げている数少ない研究論文のうちの一つである。ここで着目したい1つ目のポイントは、コーチが学ぶ方法およびコーチ教育での<sup>アセスメント</sup>評価に関するコーチの経験について書かれているものの、<sup>アセスメント</sup>評価そのものについては見落とされていることである。<sup>アセスメント</sup>評価が見落とされているのは皮肉なことである。なぜなら、私たちがコーチ教育でのコーチの経験について話しているときには、<sup>アセスメント</sup>コーチが経験した<sup>アセスメント</sup>評価プロセスと深く結びついていいる可能性が高いと考えるからである。もしあるコーチがコーチ教育を受けてポジティブな経験をした場合、その理由の一つとして<sup>アセスメント</sup>評価が挙げられるでしょう。しかし、私たちが<sup>アセスメント</sup>コーチの学ぶ方法について話す際には、<sup>アセスメント</sup>評価が学びを促進すること、<sup>アセスメント</sup>評価がコーチの学びに貢献できるということを見落としてしまうことがよくある。

2つ目のポイントは、<sup>アセスメント</sup>私たちは、<sup>アセスメント</sup>評価について考慮しないことで、<sup>アセスメント</sup>コーチの学習や能力の開発をサポートする機会を逃してしまうことである。このウェビナーでは、<sup>アセスメント</sup>コーチの学習を支援することおよび<sup>アセスメント</sup>評価がそれを可能にするということについてもお話する。

最後に3番目のポイントは、<sup>アセスメント</sup>評価を考慮することによって<sup>アセスメント</sup>コーチ教育における会話がうまくいかなくなるだけでなく、<sup>アセスメント</sup>私たちが<sup>アセスメント</sup>コーチの学習を支援する機会を犠牲にしてしまっているということである。例えば、<sup>アセスメント</sup>プログラム終了時に1回限りのパフォーマンスで<sup>アセスメント</sup>コーチを<sup>アセスメント</sup>評価するのであれば、<sup>アセスメント</sup>私たちが発信するメッセージには大きな矛盾が生じるでしょう。なぜなら、<sup>アセスメント</sup>コーチはプログラムにおいて素晴らしい経験をしているかもしれないが、<sup>アセスメント</sup>評価はその<sup>アセスメント</sup>経験とは矛盾していることがあるからである。<sup>アセスメント</sup>評価と<sup>アセスメント</sup>経験は相反するものであり、<sup>アセスメント</sup>ここには多くの問題がある。

私が提起したことについて、今は悲観的に捉えられるかもしれないが、<sup>アセスメント</sup>ウェビナーが進むにつれて、これらの問題のいくつかをどのように解決するかについて話し、それについてさらに議論を発展できればと考える。

はじめに、<sup>アセスメント</sup>プログラムにおいて<sup>アセスメント</sup>コーチを<sup>アセスメント</sup>評価する前に、<sup>アセスメント</sup>プログラム作成者または<sup>アセスメント</sup>コーチデベロッパーとして<sup>アセスメント</sup>私たち自身に問いかけることができる点について、いくつか挙げる。まず、「<sup>アセスメント</sup>コーチを<sup>アセスメント</sup>評価することで何を達成したいのか」ということについては、<sup>アセスメント</sup>プログラムを作る最初の段階において自分自身に問うべき重要な質問の一つであると考えます。すなわち、「<sup>アセスメント</sup>なぜ<sup>アセスメント</sup>コーチを<sup>アセスメント</sup>評価したいのか」、「<sup>アセスメント</sup>何を達成したいのか」、「<sup>アセスメント</sup>それを達成するにはどのようにするのがベストなのか」について理解すべきなのである。<sup>アセスメント</sup>コーチを<sup>アセスメント</sup>評価する方

法はたくさんあるが、その <sup>アセスメント</sup> 評価 プロセスには誰が関わり、何をもたらすのかについても理解すべきである。 <sup>アセスメント</sup> 評価 についてより詳しく考えることで、最終的には、特定の <sup>アセスメント</sup> 方法で <sup>アセスメント</sup> 評価 することによって誰が何を <sup>アセスメント</sup> 得るのか、 <sup>アセスメント</sup> 評価 のプロセスを通して誰が何を <sup>アセスメント</sup> 得るのか、コーチは認定書や資格を得るのか、コーチは充実した学習経験を得るのか、コーチデベロッパーは <sup>アセスメント</sup> コーチの <sup>アセスメント</sup> 評価 者としての役割を担うのかを明らかにできればと考えている。ここで挙げたことは、英国のスポーツ連盟や協会および現在進行中の共同研究プロジェクトから得られたデータの一部である。これらに加えて、私があるプログラムにおいて、「なぜこの <sup>アセスメント</sup> 方法で <sup>アセスメント</sup> 評価 するのか」について伺ったインタビュー調査から得たデータも含まれている。これらのデータは一般的な反応を示している <sup>アセスメント</sup> と考える。

論文の最後には、「私たちにとって <sup>アセスメント</sup> 評価 というのはブラックホールに過ぎない」ということが書かれている。なぜなら、 <sup>アセスメント</sup> 評価 をどのようにしたいかというアイデアを頭の中で持っていることから、実際に <sup>アセスメント</sup> ピッチや体育館で <sup>アセスメント</sup> コーチを対象に <sup>アセスメント</sup> 評価 を実施するまでは、長くて複雑な道のりだからである。

ところで、私たちは <sup>アセスメント</sup> コーチに何を求めているのだろうか。この点については研究文献の中からいくつかの例を紹介する。ブラジルの論文では、 <sup>アセスメント</sup> ポートフォリオが <sup>アセスメント</sup> 評価 に使われたとき、 <sup>アセスメント</sup> コーチは自分たちに求められていることを理解しておらず、 <sup>アセスメント</sup> ガイドラインも明確ではないと述べられている。カナダの論文では、 <sup>アセスメント</sup> コーチはそのような時に積極的に反応することができなかったと述べられている。今回は、2つの異なる地域を対象とした論文を意図的に使用した。これらのことから、 <sup>アセスメント</sup> コーチ教育の文献の中で <sup>アセスメント</sup> 評価 は見落とされてきており、研究されてこなかったことがわかる。

<sup>アセスメント</sup> 評価 に関する研究文献がほとんどないことを考えると、 <sup>アセスメント</sup> 評価 するためには注意が必要であり、それが今日の目的であるといえる。ほとんどの <sup>アセスメント</sup> コーチ教育プログラムでは、 <sup>アセスメント</sup> 評価 が行われているにも関わらず、多くの <sup>アセスメント</sup> プログラム作成者は <sup>アセスメント</sup> ガイドラインを持っていないのである。

<sup>アセスメント</sup> 評価 は、 <sup>アセスメント</sup> 正しく行うことが重要である。もし <sup>アセスメント</sup> 評価 を <sup>アセスメント</sup> 正しく行えば、 <sup>アセスメント</sup> コーチの <sup>アセスメント</sup> 学習に <sup>アセスメント</sup> 貢献する可能性がある。 <sup>アセスメント</sup> 評価 を <sup>アセスメント</sup> 設計する際には、異なる <sup>アセスメント</sup> コーチが異なる <sup>アセスメント</sup> 反応をすることについても <sup>アセスメント</sup> 受け入れるべきである。つまり、 <sup>アセスメント</sup> 評価 は、 <sup>アセスメント</sup> 1つの手法が <sup>アセスメント</sup> 全てのことに <sup>アセスメント</sup> 当てはまるわけではないことを意味している。

次に、 <sup>アセスメント</sup> クレア-マリー・ロバーツ氏に、 <sup>アセスメント</sup> プレミアリーグでは、 <sup>アセスメント</sup> どのように <sup>アセスメント</sup> 評価 について取

り組んできたのか、<sup>アセスメント</sup> 評価 を使ってコーチの学習と育成をサポートしようとしてきたのか、ということに焦点を当てて話していただく。

### 【クレア-マリー・ロバーツ氏】

世界で最も魅力的なスポーツリーグを作るために、最高の選手と最高のコーチを育成することが私たちのテーマである。私は2013年頃からコーチ育成の分野に参入しており、今回はコーチ育成に関する取り組みについてお話する。

2013年に始めた最初の取り組みは、エリートコーチ見習い制度（ECAS）であった。それ以外にも黒人や少数民族のコーチを紹介するスキーム、女性のコーチを紹介するスキームもある。コーチデベロッパースキームや、英国サッカーリーグやプロサッカー協会と連携した選手からコーチへの人材紹介スキームなどの新しい計画も間もなくオンラインで開始される。これらの計画は、プレミアリーグが実施しており、すべて学術的な認定を受けている。大学院ディプロマレベルのプログラムもあり、このプログラムは、受講生からのフィードバックに応えたものである。認定は彼らにとって非常に重要なものであり、彼らが望んでいるものでもある。また、プレミアリーグのコーチデベロッパープログラムでは、ICCEやUKコーチング（UK Coaching）などとの提携による専門的な認定も行っている。

英国では、サッカーの統治機関であるNFが行うことおよびプレミアリーグが行うことの区別がある。NFはコーチが必要とする技術・戦術に関する資格を提供しているが、プレミアリーグでは個人のプロコーチとしての能力開発が中心となっている。そのため、コーチングを専門職にするという意味では、これらの取り組みを教育的なものにする必要があると認識している。それに伴い、<sup>アセスメント</sup> 評価 についてはコーチ育成プログラムの <sup>アセスメント</sup> 評価 という課題もある。

私たちは、モジュールについて、情報提供的で総括的な <sup>アセスメント</sup> 評価 を行い、設計してきた。ここでは、アクションラーニングの研究成果を発表したり、関係性のマッピングのような個別のタスクを発表したり、メンターによる <sup>アセスメント</sup> 評価 を行うこともあったが、このような <sup>アセスメント</sup> 評価 方法は極端に学術的のものになってしまった。これらの活動から、様々なレベルの <sup>アセスメント</sup> 評価 方法があること、一方で観察による <sup>アセスメント</sup> 評価 に注目が向けられてこなかったことがわかった。また、これらのプログラムの受講生は、他の多くのことを犠牲にして、<sup>アセスメント</sup> 評価 のトピックだけに力を入れていたということが明らかになった。つまり、学習スキルや <sup>アセスメント</sup> 評価 リテラシーの面で

の不安が大きかったのである。

そこで私たちは、<sup>アセスメント</sup>評価の方法を継続的に進化させ、それぞれのコーチに<sup>アセスメント</sup>評価を委ねるようになってきた。しかし、それを正しいものにするには程遠いようである。マッカーシー氏が述べたように、私たちが苦勞していることの一つは、何がうまくいき、何がうまくいかないのかを示唆する実証的な証拠のようなものが実際にはないことである。そこで、私たちはコーチデベロッパープログラムにおいて試行錯誤のアプローチを取ってきた。コーチに対して、能力開発を目指した実践についての反省を促すためにポートフォリオを利用するプログラムや、アクションラーニング研究に焦点を当てたプロジェクト、メンターによるプレゼンテーションの観察など、私たちがこれらの取り組みのために提供したものは、構造と内容の両面であった。また、個人に対してどれだけの指導をするかというバランスと、個人が振り返るため際に創造性、自律性を認めるかというバランスがあり、これらは重要であると考える。

#### 【リアム・マッカーシー氏】

最後に、コーチ教育における<sup>アセスメント</sup>評価について検討を進めているICCEグローバルワーキンググループとその関係者を紹介する。同時に、皆さんから事前に受け取った質問についても取り上げる。このグループには、研究者、政策立案者、プログラム開発者など、多様な役割を持つ、ほぼすべての大陸から来ている専門家が属している。ワーキンググループの活動目的は、世界中のさまざまな場所、さまざまな理由で行われているコーチ教育における<sup>アセスメント</sup>評価について、既存のアプローチを文書化し、<sup>アセスメント</sup>評価の地図を作成することである。<sup>アセスメント</sup>評価方法に優先順位をつけたり、それらを優遇したりするのではなく、ここには膨大な選択肢があることを示したいと考えている。

今から、質問に回答する。まずは、南アフリカ・ヨハネスブルク大学（University of Johannesburg）のヘザー・モリス-エイトンさん（Heather Morris-Eyton）が回答する。質問は、「入門レベルのコーチの<sup>アセスメント</sup>評価は、上級コーチの<sup>アセスメント</sup>評価と比較するとどのようであるか。」である。

#### 【ヘザー・モリス-エイトン氏】

3つの異なる視点について簡単にお話する。

1つ目は、どのレベルのコーチング資格であろうと学習成果は明確化されるべきだということである。もし、コーチング資格のレベルに合わせて、あるいは、コーチが持つ経験を考慮に入れて事前学習を課すプログラムであれば、それに関連した様々な成果がある。つまり、<sup>アセスメント</sup>コーチの評価は、資格の目指すものや目的によって定められる。そして、その目的は資格のレベルによって定められるのである。

2つ目に、コーチの年齢層をみることである。まずは、コーチ教育プロセスに参加するコーチの人口統計を理解する必要がある。人生経験に加えてコーチングの経験によって、コーチがどのように学習するかが決まるためである。コーチ教育プロセスについては多くの文献がある。ある文献では、どのような方法、手段で提供されているかに関わらず、<sup>アセスメント</sup>評価が必要になること、<sup>アセスメント</sup>成人の学習者は評価に対して様々な反応をすることなどが述べられている。

3つ目に、<sup>アセスメント</sup>評価は怖いものであり、<sup>アセスメント</sup>誰にとっても評価は受けたくないものである。では、<sup>アセスメント</sup>どのようにして評価をコーチ教育のプロセスにおいて実施し、それが本物であり、透明性のあるものにするのだろうか。コーチに求められていることを理解させること、<sup>アセスメント</sup>コーチが評価のプロセスを受けてもいいと感じられるように十分な話し合いをすること、それが文脈に沿ったものになることが大切である。

最後に、質問に回答する。例えば、<sup>アセスメント</sup>コーチが初級レベルである場合、<sup>アセスメント</sup>コーチの評価は学習成果に合わせて調整される。一方、マスターコーチを目指している人の場合はどうか。オリンピックコーチやハイパフォーマンスコーチの学習成果は、はるかに高いレベルにあるかもしれないため、より高いレベルの<sup>アセスメント</sup>評価を要求されるかもしれない。

私は、すべてのレベルに当てはまる一つの<sup>アセスメント</sup>評価方法があるとは思わない。国際レベル、国内レベルでのコーチの認定を行う連盟は、<sup>アセスメント</sup>コーチ教育のプロセスにおいてどのように<sup>アセスメント</sup>評価を取り入れるかについて重要な役割を果たすと考える。

### 【リアム・マッカーシー氏】

次に<sup>アセスメント</sup>評価の目的について、もう一つ質問する。「<sup>アセスメント</sup>評価は重要であるが、学習者の学びと能力開発も重要である。どのようにしてコーチを評価し、彼らが特定の基準を満たしていることについて保証することができるのか、また、どのようにして彼らの学習と能力開発に貢献することができるのか、その両方を行うことができるのか。」について、カナダ・ラバル

大学 (Université Laval) のアンドレア・ウッドバーンさん (Andrea Woodburn) に伺う。

### 【アンドレア・ウッドバーン氏】

私は <sup>アセスメント</sup> 評価 をチーズのように例えることがある。チーズがどのように役に立つかを本当に理解するには、チーズの種類ごとに異なる特性を理解する必要がある。 <sup>アセスメント</sup> 評価 について考えると、1つ目は学習のための <sup>アセスメント</sup> 評価、2つ目は学習としての <sup>アセスメント</sup> 評価、そして3つ目は学習の <sup>アセスメント</sup> 評価 を挙げることができる。

学習のための <sup>アセスメント</sup> 評価 とは、<sup>アセスメント</sup> 診断のために <sup>アセスメント</sup> 評価 を使用することである。日本へ行く方法はいくらかでもあるが、それはどこから出発するのにもよる。

2つ目は、学習としての <sup>アセスメント</sup> 評価 で、ロバーツ氏はポートフォリオを使用したリフレクションの例を挙げた。これは、<sup>アセスメント</sup> 評価 を中心とした方法で、コーチのメタ認知スキルを開発するために使用される。

そして3つ目は、<sup>アセスメント</sup> 学習の <sup>アセスメント</sup> 評価 である。ここでは、認定資格やこのような議論の泥沼にはまる。どうすれば <sup>アセスメント</sup> 評価 に役立つかというのは、もし役立つのであれば明確だということである。

学習者は非常に現実的で、自分の目標をベンチマーク (指標・基準) にして、活動に取り組む。もし彼らの目標が認定を得ることであれば、自分に何が期待されているのかを理解しようとし、それに向かって努力するでしょう。組織にとっては、いつ、なぜそれを行っているのか、そして何が起きているのかを明確にするために、さまざまなタイプの <sup>アセスメント</sup> 評価 を使用していることを確認する必要があると考えている。

### 【リアム・マッカーシー氏】

次に、ニュージーランドバレーボール協会のデイヴ・ケールティ氏 (Dave Keelty) に質問する。ニュージーランドのコーチング戦略では、正式な認定よりも継続的に学習させることが重点に置かれている。ニュージーランドのバレーボールはそのアプローチを踏襲しているのか。もしそうであれば、実践現場ではどのように実施されているのだろうか。

### 【デイヴ・ケールティ氏】

現在は、ニュージーランドバレーボール協会だけではなく、ニュージーランドでもコーチ

育成戦略が見直されている。ニュージーランドバレーボール協会に特化した回答はないが、私の回答から、今後の方向性が見えてくると考える。

なぜ私たちは アセスメント 評価 をするのかという質問に回答すると、 アセスメント 評価 をする理由は、学習を強化し、増幅するためだと考えている。ここでは、ある特定の知識を得るためのプロセスに従う。このプロセスをどのようにフレーム化するかというと、ある核となる内容が正式な場で教えられることになる。その後、コーチはそのコースで学んだ知識を実施する機会を与えられ、仲間やコーチデベロッパーのサポートを受けながら、その知識を意味のあるものにしていく。そして、その知識を自分のものにするために、コーチング現場に戻ってからどのように新しい知識を用いて実践しているのかについて日記を書いたり、計画を立てたりすることで証拠を示す必要があるかもしれない。

コーチデベロッパーは、コーチがどのように新しい知識を学び、行動を変えるために知識を用いているのかを知るために、コーチをサポートしたり、訪問したりする。それは、コーチデベロッパーが実際にコーチの環境を見ることができ、公式な場で教えられた情報は文脈に基づいてどのように実装されているか、または実装しようとしているかを見ることができる。そして、会話に基づいてコーチへのフィードバックをすることができ、その会話は、コーチが新しい知識を学習したことについてお互いに理解した上で行われる。そこでの会話の内容は、コーチのデータベースやポートフォリオに反映される。これらのものは、コンピテンシー（専門的な能力）に関わる資料と同様に使用されている。コーチやコーチデベロッパーは、これらのコンピテンシーに関連して、自分たちがどのような位置にいると考えているのかについて知ることができる。これがニュージーランドバレーボール協会の目指すところであり、その背景にある考え方である。

私たちがコーチやその影響力を真に理解するためには、コーチに寄り添い、その人たちの アセスメント 状況や アセスメント 評価 を知る必要がある。反対に、その文脈の外での アセスメント 評価 では、私たちが望むような正確な内容は得られない。これらの理由から、バレーボールニュージーランドでは先ほど述べたようなアプローチを採用している。今後は、ニュージーランドの多くのスポーツでも素晴らしい方法が採用されるでしょう。

### 【リアム・マッカーシー氏】

アセスメント 評価 の終わりは、スナップショット（ある瞬間を切り取ったようなもの）を提供するだ

けでなく、その代わりに、ニュージーランドのような取り組みについても考え始めるべきかもしれない。オーストラリア・シドニー大学のドナ・オコナーさん (Donna O'Connor) も <sup>アセスメント</sup> 評価 に関して似たような興味・関心を持っている。

### 【ドナ・オコナー氏】

「あなたは何を達成したいのか」、「<sup>アセスメント</sup> 評価 課題の目的は何か」ということは、どのような <sup>アセスメント</sup> 評価 をするのかの指針になる。また、<sup>アセスメント</sup> 評価 のタイミングも重要である。実際にコーチにどのようなフィードバックを提供するのか、現場で実践的な <sup>アセスメント</sup> 評価 をする際には、初心者のコーチなのか、経験豊富なコーチなのかによって、<sup>アセスメント</sup> 評価 の種類が決まってくる。

現場で実践的なタイプの <sup>アセスメント</sup> 評価 をすることは、コーチデベロッパーが現場に出てコーチを指導することを前提にしていると考える。現場での実践的な <sup>アセスメント</sup> 評価 というのは、彼らがどのように指導を行っているのかを見ているだけではわからない。つまり、現場での実践的な選手や他のコーチとの関わり方などを見て、実際にそのコーチを支援したいと思えば、ロールプレイをすることもできる。コーチのレベルにもよるが、その代わりにビデオ映像を見せることにするかもしれない。その場での実践的なセッションがうまくいけば、多くの場合、ピアラニングも可能になると思う。

コーチが、コーチングについてすべてを教えてくれると思込んでいるというような実情からくる批判もあると考える。しかし、私たちが知っているように、コーチングは非常に複雑で動的なものである。もし、私たちがそれを改善しようとするならば、スナップショットのようなものや、ある要素だけを <sup>アセスメント</sup> 評価 するのではなく、何を <sup>アセスメント</sup> 評価 しているのか、その判断がどのように行われるのかという点で透明性を持たせることが必要である。そして、透明性を確保することで、フィードバックが <sup>アセスメント</sup> 評価 プロセスの一部であることも確認することができる。

もう一つは、テクノロジーを活用することである。多くのスポーツでは、コーチに自分自身のコーチングをビデオに撮影してもらい、提出させている。その <sup>アセスメント</sup> 評価 については、コーチデベロッパーが支援すること、あるいは、経験豊富なコーチであれば仲間のコーチとビデオを用いることもできる。実際にはロジスティックス (戦略的物流) の観点から、現場へ出て観察するよりも、映像をもう少し簡単に手に入れることができればと考える。映像でも、コーチが選手と構築してきた関係性や、選手の能力を読み取って反応したり、変化に対応し

たりする能力など、様々なことが見えてくると思われるからである。また、その<sup>アセスメント</sup>評価の一部としてリフレクションを使用することもできる。

### 【リアム・マッカーシー氏】

このようなバランスのとれた視点は本当に大切なことである。コーチング活動という連続体の様々なポイントにおいて、様々なアプローチを用いることができる時と場所がある。次は、ラリッサ・ギャラッティエーさん（ブラジル・カンピーナス大学）に、<sup>アセスメント</sup>評価についてもう少し伺う。

### 【ラリッサ・ギャラッティエー氏】

<sup>アセスメント</sup>評価についてはすでにいくつかの研究はある。例えば、私たちはカナダ・コーチング協会のサポートを受けながら<sup>アセスメント</sup>評価についてのレビューに取り組んでいる。論文を多く見つけることはできなかったが、研究成果についていくつかの学びを得た。私たちはこれについて研究するだけでなく、皆さんの組織では何がうまくいき、何がうまくいかなかったのかについて考えるために役立つ報告書を共有することを計画している。

コーチの行動に着目すると、プログラムを受講した直後から変わることもあるが、受講後の長期的な変化についてはあまり情報が<sup>アセスメント</sup>ない。評価についての研究は、受講後にどのくらいその変化が保持されるのかを理解するためにも役立つと考えている。そして実際には、プログラムが文脈に沿ったものであり、可能であればより個人的なものであり、常に実践的でコーチの経験に支えられたものであることが重要だとわかる。

このような情報は、国際スポーツコーチングジャーナルやコーチングレビューのような科学的な学会誌からも見つけることができる。また、ICCEのウェブサイトや世界中の連盟、その他様々な組織からも資料を見つけることができる。すでにコーチ教育プログラムを実施しているコーチ、特に成熟した<sup>アセスメント</sup>コーチは、<sup>アセスメント</sup>評価についての情報を得ることができているかもしれない。これまではプログラムの提供方法を整理しなければならなかったが、現在は、プログラムができたことによって、<sup>アセスメント</sup>評価についてより深く考えることができるようになった。皆さんには、文書の提供だけでなく、ポッドキャストや非公式な情報も共有していきたいと考えている。

### 【リアム・マッカーシー氏】

アメリカ合衆国で5年間働いた私の経験では、アメリカ合衆国は信じられないほど豊かで多様な活動に取り組んでいる。そこで、キャメロン・キオソグルースさん（アメリカ合衆国・ドレクセル大学、US ROWING）には、アメリカ合衆国での経験を踏まえて、<sup>アセスメント</sup>評価に関する異なる意見や視点、課題を解決しようとしている組織へ向けて何かアドバイスがあるかを伺う。

### 【キャメロン・キオソグルース】

<sup>アセスメント</sup>評価の重要性についてはまだまだ学ぶべきことがたくさんある。特にアメリカ合衆国では、<sup>アセスメント</sup>コーチングの評価だけでなく、コーチデベロッパーの育成にも様々な環境や文脈的要因が絡んでくる複雑さがある。私たちがこのワーキンググループとして取り組むことは、非常に重要な側面を持っている。私たちが今、世界中で学んでいることはたくさんあり、質疑応答の中のコメントにもあったが、私たちが生きている世界の複雑さにも触れていると思う。何をもたらずにしても、私たちが一丸となって取り組む必要性はさらに高まっていることが示されていると感じている。

そして、このワーキンググループの重要性は、現在何が行われているのかを理解し、研究だけではなく、実際にはどこにギャップがあるのかを見極めることにある。

### 【リアム・マッカーシー氏】

これは共同研究の側面だと思う。研究と実践の両方で協力して、何が有効なのかについての理解を深めることが重要である。今までに強調されているように、それは文脈に沿ったものであり、一括りにはできないためである。

最後に、アフリカとヨーロッパの2つの大陸で仕事をしている、ペレ・クヴァルスンドさん（ノルウェーオリンピックパラリンピック委員会）に質問する。<sup>アセスメント</sup>もし評価が行われる際に文化が反映されているのであれば、それについてどのような経験してきたのかについてである。

### 【ペレ・クヴァルスンド氏】

スポーツのグローバル化によって、<sup>アセスメント</sup>コーチの評価はより標準化され、地理的な文化や文

脈よりも、スポーツ特有の文化に基づいたものになっていると感じている。そのため、スポーツ組織としては、より保守的で標準化された形式的なシステムが必要とされているところもある。また、コーチ教育とコーチデベロッパー育成の分野では大きな違いがある。コーチ<sup>アセスメント</sup>評価の方法においては、あまり構造化されていないが動的であるものもあることが挙げられる。私の経験では、コーチ教育はほとんどがコーチングの実践現場で行われるので、このウェビナーで話されていることとは異なると感じている。

私はいくつかの違いや類似点を観察してきた。システムの成熟度に着目すると、成熟していないシステムの方が透明性は低く、時には<sup>アセスメント</sup>評価の仕方が罰的になることもあるように感じた。成長というよりも、認定のための<sup>アセスメント</sup>評価に重点が置かれているとも捉えられる。これについては、システムの成熟度によって少しずつ変わってくる。また、フィードバックを受けたあと、どのように行動に移すかということも大きく異なると思う。<sup>アセスメント</sup>評価を通して素晴らしいフィードバックを得ることもあるが、次は何をすれば様々なシステムを成長させることができるのだろうか。私は地理的なことについて考えすぎないようにしたいと考えているが、私が仕事をしてきた様々なシステムの成熟度についてもっと見ていきたいと考えている。

#### 【リアム・マッカーシー氏】

このワーキンググループは、コーチングコミュニティの中に根ざしたグループでいたいと考えている。ここには、研究者やプログラムデザイナー、プログラムを提供する人などがいると思うが、そこで活動している人たちが抱える問題や疑問、好奇心にお答えできればと考えている。

本日はありがとうございました。